新刊紹介

藤原与一著「方言学」

山本俊治

一

新刊紹介に、著者のことを「先生」と書くのは、一般的ではないようだが、この本は、おのずとそうよばざるを得なくする。この本は、理論と実践の両面から、読者を、きびしく、あたたかくひきつけて、ほんとうにありがたいという気をおこさせる。

先生は、かつて、金田一京助先生のおことばであったか――を引用されて、テーマ三年、教養七年、沈潜十年というような意味のことを言われた。先生がこの道におはいりになって三十有余年、ひたすら、方言に生きてこられた尊い御生活―学問の記録がこの本である。あとがきによれば、「方言学」への構想は、すでに昭和九年、「国語方言学」の草稿となってあらわれている。それから今日まで、実践を通じて、あたためにあたため、かもしにかもされた結果がこの本である。

二

巻頭に簡目次、巻末に詳目次が立てられている。一編を読了した感激を、詳目次をおいながら、あそこ、ここと新たにしていくのは、何とたのしいことか！　索引も懇切であり、単に当該事項の検出にとどまらず、詳目次とも関連させながら、その関係事項とともに、全体的に把握領解できるようになっている。以下簡目次をおって各章を概観しよう。

三

序章―方言研究の進歩のために　本書をつらぬく根本精神が要約されている。方言学即言語地理学とするような誤り、それは方言研究の共時論が確立されていないところからくる。まず必要なことは、一方言を対象とするインテンシブな調査研究から出発すること――方言の共時態認識＝生活語把握が必要である。そのためには、方言踏査の精神と厳密を期する記述精神が必要である。方言研究者として生きることは、方言の踏査者、忠実な方言記録者として生きることだと力説される。

第一章―学としての成立　方言の概念を、地方性に立脚するものとしての立場、生活語としての立場の二面から規定される。そしてこのような諸方言が、一国語の内部で、たがいに対立して存在する状態を対象として方言学が成立する。このような方言学は、方法学として、国語学を基本的に開拓し、推進せしめるものであり、方言学の理想もそこにあると説かれている。

第二章―方言学の構造　まず、方言学の内部構造に、共時論・通時論の二方向をみとめ、ここに、共時方言学とその発展としての通時方言学が成立する。ついで、高次の共時態観によって、両者は統合され、ここに高次共時方言学が成立し、方言学を最後的にしめくくるとのべられている。

方言学は、まず、方言共時態の認識から出発する。方言共時態は可動的に大小各様の地

域にわたってみとめられるが、要は、それらを生活語として把握することである。共時方言学は生活語学である。このような共時方言学は、言語の統一と分化が常にくりかえされ、したがって、何らかの方言共時態が常に存在するかぎり、それに即応して、常に存立すると言われる。そして、方言研究がただちに言語地理学に向かいがちであった誤りを指摘され、本格的な通時方言学は、本格的な共時方言学を前提とすると強調される。

方言共時態の並存―方言分派が史的成果とすれば、これは必然的に方言通時態認識につながる。ここに通時方言学が成立する。通時方言学は、その内容を方言事象地理学と方言分派地理学に分けられる。後者は前者の成果を生かして、方言区画を設定し、方言分派の相互関係を追求し、最後には、国民の国語生活史、国語生活圏史を再構しようとする。とすれば、ここには、すでに生活語観の要請がみられる。生活語観は、通時方言学にも十分滲透せしめねばならない。通時方言学の対象範囲は、広狭各様にとられるが、もっとも大にしては、一国語の諸方言全般にわたっての通時態を処理することになる。これが通時方言学の理想であるとのべられる。

方言通時態は、まさしく現代諸方言という、よこのひろがりであり、統合一括することができるものである。ここに高次方言共時態の認識が成り立ち、それに即応して高次共時方言学が成立する。発展的に位置づけられてきた、共時方言学と通時方言学は、高次共時方言学により一元的に統轄される。その内容は、統合の記述体系を得、特性論をおこない、方言の世界に国語の発展的動向―歴史的法則をみようとするのである。が、これらの方向は、すべて話し手たちの生活語の問題として統合される。ここに、生活語学のむすびとして、高次共時方言学が位置づけられる。生活語観は、必然的に教育論につらなり、標準語論をうむ。このような高次共時方言学は、正に展望の学であるとのべられる。

四

以下は、第二章でのべられた各項についての、先生の実践を中心とされた解説である。

第三章―共時方言学　まず、その対象―生活語、その記述法をのべ、理想の共時方言学の構想を説かれる。ついで、生活語の記述体系を、表現法・語詞と語彙・音声面にわたって詳述される。つづいてその実践例が開陳される。先生が目下すすめられつつある全国五十要地の地点踏査の一つ、比較的最近のお仕事である、三重県（伊賀）上野市滝之原（タキノハラ）の方言調査について、その出発から整理にいたるまで、作業過程を追って詳細に解説される。まるで、お供しているような錯覚にとらわれ、きびしく、やさしい御指導を感じつつ、思わず読み終えてしまう。結語として、調査法の精神、方言人の無自覚、方言にみる国語の深み、共時方言学の要点的処理、方言地理学への発展について言及されている。

第四章―通時方言学　はじめに事象地理学と分派地理学について解説され、通時方言学を、従来のように、外的言語学の世界においやらず、内的言語学としても深めていかねばならぬとのべられる。ついで、事象地理学、分派地理学、それぞれの内容にしたがい、通時論的研究の実践例を示されている。全国を踏査された数少ない研究者の一人として、一個人の脚と耳と眼でたしかめられた豊富な方言事象が、三十葉におよぶすぐれた分布図とともに、その御解説を一つ一つ深く印象づけてくれる。これらの御研究を帰納されて、方言事象分布の理として、周布・条件反射・自己改新・政治的規制・特定人為の諸理をたて

られる。このような理によって方言事象は分布し、そのような傾向分布の累積によって方言分派が形成される。つづいて、その方言分派認定の手順、その規準を解説し、方言分派の法則におよばれる。やがて論が日本語方言の分派、その系脈、その成立史にいたるころは、そのすさまじいばかりの迫力に圧倒され、息もつがせず読ませられる。

第五章—高次共時方言学　方言研究は遂には高次共時方言学にいたらねばならない。その内容は、問題項目の事象を単位にした歴史的記述をおこない、そのような事象論の集成をはかって得られた記述体系について、その特性をみいだし、それをささえる内面的な歴史的法則を探究する。以上の事象論、特性論のそれぞれにつき、全日本語方言状態を対象として解説され、最後に、日本語方言の特性をささえる歴史的法則として自在性と社会意志を帰納される。

五

結章—方言学のために　これは序章に応じるものである。以上論述してこられた方言学の理論と実践をふりかえって、かさねて方言学の組織と性格を要約し、方言研究における生活語観を強調し、標準語論、教育論を生む展望の学としての方言学を説かれている。さらに、現在学としての方言学の無終をのべ、国語学との関係に言及して、方言学が国語学に合致しつつその独自性を発揮していかねばならぬことをのべられる。

六

この大著を読了して、まず感ずるのは、あまりにもみごとな理論と実践の融合である。眼をうばうばかりの宏壮雄大な先生の学問体系が、まことに無理なくその実践から帰結されている事実である。現実にしっかり根をおろした理論である。このような理論であって、はじめて世をおおい現実を高めていくことができるのであろう。ことば即生活、生活即学問という先生のつよい御信念に圧倒される思いである。その迫力—活力は、正に学問の実践者として「方言の野」において吸収されたものである。

つぎにこの書物に一貫しているのは、絶対純粋をめざしての精密主義—きびしい科学精神である。精密主義に徹するためには、豊富確実な資料を必要とする。そのためには忠実な方言の記述が必要である。方言研究者は、まず、忠実な踏査者たれ、方言の記述者たれと強調される所以であろう。

さらにこの書物からにじみでてくる、あたたかなヒューマニズムの精神をみのがすことはできない。生活即学問とされる先生にとって、学問愛はむりなく人間愛につながっていくのであろう。全編をおおう方言人に対する、あたたかなお気持の流露をしみじみあじわうのである。

いずれにしろ、まことにありがたい書物である。時には山頂から、時にはともに急坂に汗しながら方言をおしえてくださる。初学者にはその向かうべき目標と方法を、いくぶんなりとその道にふみこんでいる者には、きびしい反省とあたらしい勇気を与えてくださる。これは、そのような本である。

—三省堂。昭和三十七年六月十日初版発行。A5版六百八十頁。定価二千円。—

付記　おわりに浅学怠惰の身、十分に先生の意をくみえず、いたずらに妄言を弄し、紹介はおろか、誤り伝えている点の多かろうことを思い、学恩の前に恐怖するばかりである。

——武庫川女子大学助教授——